

# やの は びょうぶ 矢野派の屏風

館蔵品展

会期:2003年3月25日(火)~4月20日(日)

## 矢野派とは？

矢野派は雪舟の画風を基調とする“雲谷派”<sup>うんこくは</sup>の流れを汲み、江戸時代を通じて肥後細川藩の御用絵師<sup>ごようえし</sup>として活躍した一派です。雲谷派を興した雲谷等顔<sup>とうがん</sup>の弟子で矢野派の祖である田代等甫<sup>たしろとうほ</sup>は細川三斎<sup>さんさい</sup>に仕え、等甫の弟子で矢野派初代の矢野三郎兵衛吉重<sup>よししげ</sup>は細川忠利<sup>ただとし</sup>に仕えていました。そして、雪舟流の様式を再興し、矢野派の画風を発展させたのが4代雪叟<sup>せつそう</sup>と5代良勝<sup>よしかつ</sup>です。

この展示ではその雪叟と良勝の手になる屏風を紹介します。

### 矢野派・略系図

(雲谷等顔) —— 田代等甫 —— 初代 矢野三郎兵衛吉重 —— 2代 吉安 —— 3代 茂安 —— 4代 雪叟 —— 5代 良勝 —— 6代 良敬

## 【矢野派の再興者・4代雪叟(1714~1777)】

通称は喜三右衛門、安良。号は龍谷、鶴仙齋、窓月、喫茶亭など。正徳4年(1714)、矢野家2代吉安の弟子山田理助の子として生まれ、3代茂安に学び、後にその養子となり矢野家4代目を継ぎました。3代茂安の代矢野家の画法は衰退しましたが、雪叟は雪舟や牧谿など和漢の古画の模写等を通じて雪舟流の画風を再興しました。矢野派の実質的な再興者とされる人物です。



矢野雪叟の印  
( 矢野家累代印譜集より)

ワシはどこにいる  
のう？



(左隻)

竹林七賢図屏風 矢野雪叟画 紙本墨画(部分彩色) 六曲一双 各159.1×362.4

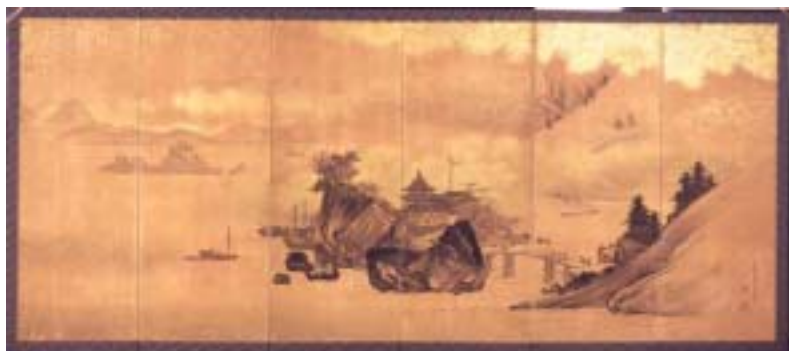
竹林七賢とは中国魏晋両朝の交替期(3世紀半ば) 俗世を離れ竹林の中で清談した七人の賢者のことで、日本では古くから画題として好まれました。この屏風は雲谷等顔の手による竹林七賢図屏風(永青文庫蔵)を模したものと考えられます。しかし、雪舟の画風に倣って岩の描き方を変えたり、また部分的な彩色を行うなど、矢野派の始祖等顔に習いながらも、さらに雪舟の画風に迫ろうとする雪叟の意気込みが伝わってくる作品です。

よしかつ  
**【矢野派の全盛期・5代良勝(1760~1821)】**

通称は右膳。号は龍谷、千嶂堂、枕流亭、漱玉菴、雪観齋、桂光楼、水竹居ほか。雪叟によって再興された雪舟流の画風をもとに、实景や動植物の写生、あるいは西洋遠近法を取り入れるなど、多様な作品を数多く残し矢野派の画風や画域を押し広げました。良勝の代には矢野派への入門者も多く、またこの時期の現存作品が最も多いことから、良勝の代(特に19世紀初め)に矢野派は全盛期を迎えたといえます。



矢野良勝の印  
 ( 矢野家累代印譜集より)



(右隻)

**山水図屏風** 矢野良勝画 紙本墨画 六曲一双 各155.2×362.2



(右隻)

**春秋花見図屏風** 矢野良勝画 紙本著色 六曲一双 各136.0×255.6

山水図屏風からうかがえるように、5代良勝は雪叟によって再興された雪舟流の筆法をよく習得し、それを基礎として新たに他流派や中国の古画を学び画風を広げました。また、春秋花見図屏風は良勝が雪舟流に縛られず大和絵の領域にまで画域を広げていたことがわかる作例で、『伊勢物語』などの王朝物語を題材に描かれたものと思われます。

**展示リスト**

	作品名称	数量	形態	タテ×ヨコ	作者	時代
1	竹林七賢図屏風	六曲一双	紙本墨画(部分彩色)・屏風装	各 159.1×362.4	矢野雪叟	江戸時代中期
2	矢野家累代印譜集	一冊	紙本朱印貼付・折本	21.0×15.5(畳んだ状態)		江戸時代後期
3	徒然草抜書	一巻	紙本墨書・卷子装	28.2×651.0	矢野良勝	江戸時代後期
4	山水図屏風	六曲一双	紙本墨画・屏風装	各 155.5×362.2	矢野良勝	江戸時代後期
5	春秋花見図屏風	六曲一双	紙本著色・屏風装	各 136.0×255.6	矢野良勝	江戸時代後期

**~屏風の数え方~**

単位は「隻」で、「二隻」が左右対となる場合はまとめて「一双」といい、向かって右を「右隻」、左を「左隻」と呼びます。また、屏風の面の数によって「四曲」「六曲」と呼び、六面で一点の屏風は「六曲一隻」、六面で左右対の二隻の場合「六曲一双」と呼びます。